

平成 26 年度共同利用研究・研究成果報告書

研究課題名 和文：ライチョウ家族ケージ保護の試み

英文：A trial of Lock Ptarmigan conservation by cage

研究代表者 中村浩志（信州大学名誉教授）

参加研究者 小林 篤（東邦大学理学部博士課程院生）

研究成果概要

2014 年ライチョウの家族ケージ保護検討内容：

昨年の 2013 年に乗鞍岳で実施した孵化後の家族ケージ保護は、死亡率が高い孵化後のヒナの生存率を高めるのに有効であることを実証できた。しかし、昨年ケージ保護した 3 家族のうち、最も長いものでケージに収容するまでに 4 日間かかっている。そのため、ケージに収容するまでの間のヒナの死亡をなくすため、移動式の小型簡易ケージを用意し、誘導途中でも悪天候と補食者からヒナを守る手法の検討を行った。

用意した小型簡易ケージ：一基 幅 67.5 cm × 長さ 90.0cm × 高さ 45.0 cm

実施した小型簡易ケージによる保護の概要：以下の①と②の 2 家族で実施。

①の家族 母親－2 歳 足輪：青白・赤黄 ヒナ－5 羽（孵化 5・6 日目）

7 月 13 日 9：10 ①の家族を発見し、誘導と付き添い開始。

その間に小型簡易ケージを近くに設置する（写真 1）。

17：40 ケージに家族を収容（写真 2）。ケージに雨と風よけのシートをかける。

7 月 14 日 11：05 天候の回復を待ち家族をケージから出す。誘導と付き添い開始。

16：40 ケージに家族を収容。ケージに雨と風よけのシートをかける。

7 月 15 日 11：00 環境省長野事務所宮坂さんの到着を待って、家族をケージから出して放鳥。ヒナは 5 羽とも無事。

②の家族 母親－2歳 足輪：赤赤・赤白 ヒナ－6羽

7月15日 朝までに孵化し、午前中に巣立ち。

(前日の夕方、卵にヒビが入っているのを確認)

13:20 巣より20mほど離れた場所で、巣立ち後の家族を確認。
誘導と付き添い開始。

その間に①の家族で使用した小型簡易ケージを撤去する。撤去したケージを東大宇宙線観測所の横に設置した大ケージ(昨年に引き続き同じ場所に設置)(写真3)と巣立った巣との中間地点に移して設置(写真4)。

17:45 設置した小型簡易ケージに家族を収容。ケージに雨と風よけのシートをかける(写真5)。

7月16日 7:40 家族を小型簡易ケージから出す。誘導と付き添い開始。

11:50 大ケージ(写真3)に家族を収容。この日は、一日中雨と風が強いため、ケージからは出さない(写真6)。

7月17日 5:55 家族を大ケージから出して放鳥。ヒナは6羽とも無事。
調査終了。

小型簡易ケージによる孵化後の家族の保護検討結果と評価

今回実施した小型簡易ケージによる孵化後の家族を人の手で保護する試みは、2家族共に成功し、この方法が有効であり、実施可能であることを確認することができた。

昨年実施した大・中・小の固定ケージで孵化後の家族を保護する試みと今回の小型簡易ケージを用いた保護の試みが共に成功したことから、孵化直後からヒナが自分で体温調節と飛翔が可能となる孵化後1ヶ月までを通して孵化後の家族を人の手で守ってやるのが可能であることが確認できた。

昨年と今年の検討から、ケージを使って孵化後の家族を保護することが可能であり、実用化のめどをつけることができた。そのため、来年の2015年にはライチョウの数の減少が最も著しい南アルプスの白根三山で本格的に実施することが予定されている。この山域では、数の減少の結果、なわばりがまばらに分布するので、固定ケージまでに家族を誘導する日数が多くかかることが予想される。今回の小型簡易ケージによる孵化後の家族保護の成功により、この方法で離れた場所まで安全に家族を誘導することが可能であることを確認でき、域内保全策の一つとして大いに役立つことが期待される。